『okatteにしおぎ』で起こっていること

●『okatteにしおぎ』の成り立ち

今回から3回にわたり、筆者がオーナーとして関わっているシェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』（以下okatte）での3年間の観察および研究をもとに、これからの社会や経済に影響を与えるのではないかと思われる“コモンズ型シェアライフ”について論じてみたい。この観察と分析は、筆者の立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科での研究に基づくものである。

『okatteにしおぎ』とは

okatteは2015年4月にオープンした木造一戸建ての施設である。2階建ての4個室および水回り等を4組が入居できるシェアハウスとして、1階の15畳の板の間+畳スペースと、10畳の土間のキッチン+ダイニングを会員制シェアキッチンとして使用している。シェアキッチン部分には日本の伝統的な家屋を参考にした田の字の間取りを採用し、内装には国産の杉等の木材を多用、草屋根や雨水利用などの環境共生型の設計を取り入れた空間となっている。

okatteのコンセプトは「つくって食べるみんなの“お勝手”」である。公式サイト（http://www.okatte-nishiogi.com/）では、「家の外に持つ自分たちのもう一つのキッチン&リビング。シェアしながら育てていくメンバーシップ制のお勝手です。みんなでごはんを囲む場所、一緒に作りませんか。」と記載している。

『okatteにしおぎ』のウェブサイト

『okatteにしおぎ』ができるまで

もともとokatteの建物は、家族4人で居住する住宅だったが、家族構成の変化や相続の問題にともないどのように活用するかという課題が浮上していた。通常、アパート経営を考えるところだが、筆者は、地域の高齢化や、近隣のコミュニケーションの希薄さへの懸念もあり、「住み開き」など、時間と空間のシェアを行うことで、ご近所の活性化にもつなげることができないだろうかと考えた。また、今後地域を拠点とするスモールエコノミーの台頭に対応する事業を行いたいという希望もあった。

そんなとき、知り合った㈱エヌキューテンゴの齊藤志野歩氏に事業コーディネートをお願いし（エヌキューテンゴは「まち暮らし不動産」を掲げ、ユニークな事業を行っている）、建築設計のビオフォルム環境デザイン室（里山長屋等を手がける）とプロジェクトチームを組んだ。ブレーンストーミングによる試行錯誤を重ね、近隣の人たちが自由に料理をして食べられ、さらに食に関する小商いのスタートアップの場にもなる共用型のキッチンというコンセプトと設計概要が固まった。さらに、こうした場に関心のある20人ほどに呼びかけ、4回のワークショップで空間の利用の仕方や運営の仕方を考え、実際の設計や企画に反映させた。また、工事の際には見学会や草屋根作りワークショップ、大黒柱やはりになる杉材を作っている奥多摩の製材所見学会などを開催し、Facebookページで発信するなど、関心のある人に完成までの過程を共有してもらった。ロゴやフライヤー、ウェブサイト作りにはワークショップに参加してくれたグラフィックデザイナーおよびウェブデザイナーの協力を仰ぎ、コンセプトを反映した制作物を完成させた。

『okatteにしおぎ』のキッチンは国産の木を多用した土間で、環境にも配慮

『okatteにしおぎ』が紹介された新聞記事

現在okatteには4人の住人と100人を超えるメンバーがいて、いろいろな活動が行われている。また、新聞雑誌やテレビ番組でも紹介され、筆者や齊藤氏が空き家問題やまちづくりのシンポジウム等に呼ばれる機会もあり、地方自治体や海外からの視察希望も増えている。

たけのうち さちこ●㈱シナリオワーク代表取締役。女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案を多数手がける。2015年4月、自宅を改装し、シェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』をオープン。18年3月、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士前期課程修了。

●『okatteにしおぎ』のメンバー

『okatteにしおぎ』のメンバーシップ

okatteはメンバー制である。住人および会員は、月会費を払うことにより、「okatteメンバー」の一員となり、シェアキッチン部分の鍵を開けて入り、自由に利用することができる。入会については、ウェブやSNSを使って、説明会への参加者を募集し、そこで趣旨に賛同した人に会員になってもらっている。

メンバーになると、家族や友達、会員同士で食事を作って食べるほか、1人で仕事や読書をしたりする、イベントや会議、ワークショップを行う等、さまざまな使い方ができる。食に関するスモールビジネス（カフェ、菓子製造等）を手がける人も使えるよう、キッチン部分は営業許可を取得している。2カ月に1回、オープンデーとして、地域にokatteを開くイベントを実施している。

図書部主催のブックカフェで、自分の一押しの本を紹介

夏のオープンデーでは、といの設計から竹の調達、製作までをメンバーで行った流しそうめんを実施

okatteは、コーディネーター1人と会計担当1人以外は、会員の自主的な管理運営にまかされている。毎月1回の定例会（参加は任意）のほか、会員同士の連絡については、インターネット上のグループウェアを用い、カレンダー機能を利用した予約登録、掲示板機能を利用した意見交換や事務連絡が随時行われている。このほか、会員の自主的な活動として、掃除部、手芸部（趣味としての手芸のほか、布巾の作成も行う）、図書部（本棚の整備）、園芸部（庭の手入れ）といった部が結成されている。これらは固定的な組織ではなく、興味を持った人が数人で始めた出入り自由のゆるいつながりのグループである。

『okatteにしおぎ』のメンバー・プロフィール

2018年10月現在、会員は女性が約8割。年齢的には30～40代が多いが、10～60代まで幅広い。単身者が約半数を占める。会員のプロフィールを見ると、ワーキングマザー（夫を含めた家族で来る人も多い）から、会社員や公務員、フリーランスクリエイター、自営業等、本当にさまざまである。住まいは自転車で15分以内という近隣居住者が多いが、中には電車で1時間かけてくる人もおり、地方との2拠点生活をしている人もいる。3年の間に結婚、出産、子どもの成長等、ライフステージの変化も見られ、okatteで会員による結婚パーティも開かれた。

2017年7～9月、会員にアンケートとインタビューによる質的調査を行った。その結果、会員は一般的な生活者に比べ、仕事や趣味、社会貢献といった活動に対する意欲が高く、地域コミュニティでの人的交流に関心が高いことがわかった。ただ、彼らがもともと地域と関わる活動をしていたわけではない。

オープンデーのチラシは入り口に掲示

「東日本大震災のとき、誰も知り合いがいない避難所に1人で行くことがとても不安になった」「夫と死別し、子どもが独立して一人暮らしになったが、区内に知り合いをつくっておかないと、何かあったときにまずいと思った」「家族で近所に引っ越してきたが、地域に知り合いがいたほうがよいと思った」等、何かのきっかけで、近所とつながりを持ちたいと思うようになったようだ。その一方で、必ずしも近隣同士の人付き合いが得意ではないと思っている人も多い。

これまで、仕事等で忙しく、近所の人との付き合いには消極的だった人が、震災や家族の変化、引っ越しといった出来事を機に、地域コミュニティに関心を持つようになったものの、実際にはなかなか自分に合ったコミュニケーションのきっかけを持ちづらいということが、okatteのような場への関心につながっていることが推察される。

●「創発」の場としての「コモンズ」へ

出会いから「創発」へ

2017年のアンケート調査結果を見ると、okatteのメンバーが入会時に期待したことは、「人間関係を広げること」「誰かと一緒に食事をすること」「キッチンを自由に使うこと」「イベントに参加すること」と回答した人が多い。実際、食事会やイベントへの参加経験率は高く、「家族や仕事とは違う人とつながれる」「これまで知らなかった個性や専門性を持つ方と知り合うことができた」など、家族や友人とは異なる、多様な人との出会いへの満足度が高いことがうかがわれる。

そして、オープンから3年が経過したokatteでは、出会いの楽しさよりもう一段深まった、他者との相互的な協力関係から思いがけない新しいことが生まれる「創発」（自律的な個が集まって相互に影響し合い、組織化することで、当初は予期しなかった新しい活動や価値が生まれること）が拡大している。

その一つの事例として、釜石の老舗味噌醸造会社とのコラボレーションによるみそケーキの開発を挙げることができる。東日本大震災の際、ボランティアとして行った釜石で味噌醸造会社の方と知り合ったメンバーが、岩手を応援するイベントで味噌を使った菓子を販売したいと思いついた。自身は料理が苦手なので管理栄養士のメンバーに相談し、味噌パウンドケーキを作ることになった。他のメンバーも試食や包装作業で協力し、イベントで販売したところ完売となった。それを知った醸造会社の専務から、そのレシピを商品化して発売するため、県の食品コンクールに出品したいという話があった。レシピを開発し、グラフィックデザイナーのメンバーがパッケージとポスターをデザインし、結果は優秀賞を受賞。その後、地元の洋菓子屋から発売され、人気商品になった。醸造会社からはさらなる商品の開発への協力依頼が来た。また、okatteに釜石の海産物が送られたり、専務と娘さんがokatteに出張しての味噌作りワークショップを開催するなど、交流が広がっている。

みんなで食事をすることで知り合いが増える

この事例以外にも、実家の田んぼを使った稲作部や、果樹農家の余った果実を使ったジャム作り、メンバーの一人の発案に賛同した他のメンバーが通訳をかって出たことによる海外からのゲストのトークイベント等、okatteではメンバー同士が気軽に声を掛け合ったり名乗りを上げたりすることで、一人ではなかなかできないことをカジュアルに実現させる動きが盛んである。

創発のプラットフォームと「コモンズ」論

自由度の高いシェアスペースにおいては、そこに集う人々の間で時としてこのような創発が起こる。okatteにおいても、家族や友人のような同質性の高い関係ではなく、異質な人との場の共有という機会を得ることにより、面倒さや違和感を覚えながらも、自分自身の考え方の幅が広がったり、人にはない自分の価値を発見したりという経験をし、その結果、自信が生まれ、新たなことにチャレンジしてみようという意欲が高まったという人が多く見られる。筆者はこうした創発のプラットフォームとして機能する現代のシェアスペースのメカニズムを、近代以前の共同体に見られる牧草地や入会地の研究から発展した「コモンズ（共有地）」論を用いて読み解いてみた。基本的にプライベートスペースとパブリックスペースしか残っていない現代の都市生活の中で、「コモンズ」的な場を持つことが都市住民の生活のパラダイムを変え、社会や経済にも影響を与えるのではないかという仮説について、次の残り2回で明らかにしていきたい。

メンバーの力を合わせることでできた、みそケーキ

米国・ポートランドからゲストを招いてのトークイベント